

## 第一問 解答例

問1 人間が野生動物に擬態し、その所作を踊りとして模倣するという儀礼や芸能によって、人間が自然の世界に入り込み、自然に内在する力を文化の世界に組み込んでいこうとすること。

問2 旧石器時代の人類は、洞窟に自分の内臓感覚を外化し、その壁面に野生動物を模写することで、自然の一部としての自己を確認し、自分が生命体であるという記憶を刻印したということ。

問3 海の民が星の配置を読んで船を操縦する自らの方向感覚に投影したり、西欧の人々が天体を読んで自らの身体や世界を類推したりしたように、星の配置や運行を人間の身体に写しとること。

問4 原初の人類が野生動物の所作を模倣した舞踏を生んだように、模倣は人間文化における創造性の根源だが、これと同じことは人間個体の成長過程にも見られ、子供が人や動物やものを自在に模倣する遊戯が創造行為の準備段階になっているということ。

問5 人や動物の音声を真似る擬声語、人やものの動きを写す擬態語、あるいは主に手で書かれる文字のなかに残っている、模倣的な肉体的・物質性的こと。

問6 内臓や星や舞踏を読むことにはじまり、感性的・身体的な模倣を繰り返すことで創造されてきた人間文化の帰結の一つが文字だが、現代のデジタル化した社会では、文字を手で書くという模倣的な肉体的・物質性や感覚的悦びが失われつつあるから。

## 第二問 解答例

問1 生きている人間の身体は静止した状態に見えてもどこかが必ず動いているので、他者に動かされることなく自らひとりで動くものを「動物」と名付けたのはいかにも適切だということ。

問2 アンドロイドは人間に限りなく近いロボットを目指して作られるが、それが人間らしいかどうかを決めるのは、見かけが人間に似ているということよりも、何もしていないときの人間のかすかな動きをどれだけ再現できるかであるということ。

問3 肉眼では見えないが、筋肉がつねに分子レベルで動いていることによって、生体自体もつねにゆらぐように運動していること。

問4 人間に近いアンドロイドと対面した人間は、アンドロイドとの間に社会的関係があるように感じるために、その目を見てみると、人間の目を見続けられないのと同じ感覚になるから。

問5 人間に近いアンドロイドと対面した人間は、その目を直視し続けられないのと同様、容易に触ることもできない。このことが示しているのは、人間が目の前の存在を生きた人間と感じる条件に対面性が関係しているということだが、その対面性の根底には、身体の微細な動きの感知があり、それが、相手をモノのように扱ってはならないという倫理性を生んでいるということ。

問6 アンドロイドに人間らしさをもたせるには、外面的な類似性を限りなく追求する必要はなく、十分に人間らしい目と最低限の口といった、人間らしさを感じさせる最小の要素によって、対面する人間に社会的関係や倫理性があると思わせるだけでよいのではないかという問題意識。

## 第三問 解答例

問1 ① ㊦たいそうあきれるほど

② ㊦福足君に教え申し上げるうちに

③ ㊦我慢できず

問2 下二段動詞「かる」未然形＋尊敬の助動詞「さす」連用形＋尊敬の四段補助動詞「たまふ」連用形＋完了の助動詞「ぬ」連用形＋過去の原因推量の助動詞「けむ」連体形

問3 福足君に東三条殿のお祝いの舞を舞わせようとしたが、当日に舞台の上で舞うことを嫌がり、かんしゃくを起こして髪や衣装を乱したことが原因で、父の栗田殿が茫然自失の状態になった。

問4 始末に負えないほど駄々をこねる福足君のことだから、お祝い当日に何かとんでもない問題を起こすだろうと思っていたことだよ。

問5 ア ㊦父の栗田殿はいうまでもなく、他人でさえ、ただただむしように感動し申し上げた。

イ ㊦中関白殿の、福足君を自分の腰のあたりに引きつけて一緒に舞わせて、福足君の恥も目立たなくし、かえって当日の興趣も格別のものにした、思いやりがあり、機転が利いた態度。

問6 イ↓オ↓ウ

## 第四問 解答例

問 1 (1) || そのひとあげてかぞふべからず<sup>(ウ)</sup>

(2) || 著書之士

問 2 ② || ひやく<sup>(ヤ)</sup>くにいちにもそんせず

⑤ || けだしかくのごとし

問 3 (1) || 方<sub>下</sub>其用ニ心与力之<sup>上</sup>劳

(2) || 書物を書く人が著述に対して精神と体力を尽くす苦勞に比べると

問 4 (オ)

問 5 ① || より

② || またなんぞ

③ || つひに<sup>(ウ)</sup>

④ || それ

問 6 (イ)・(エ)・(ク)